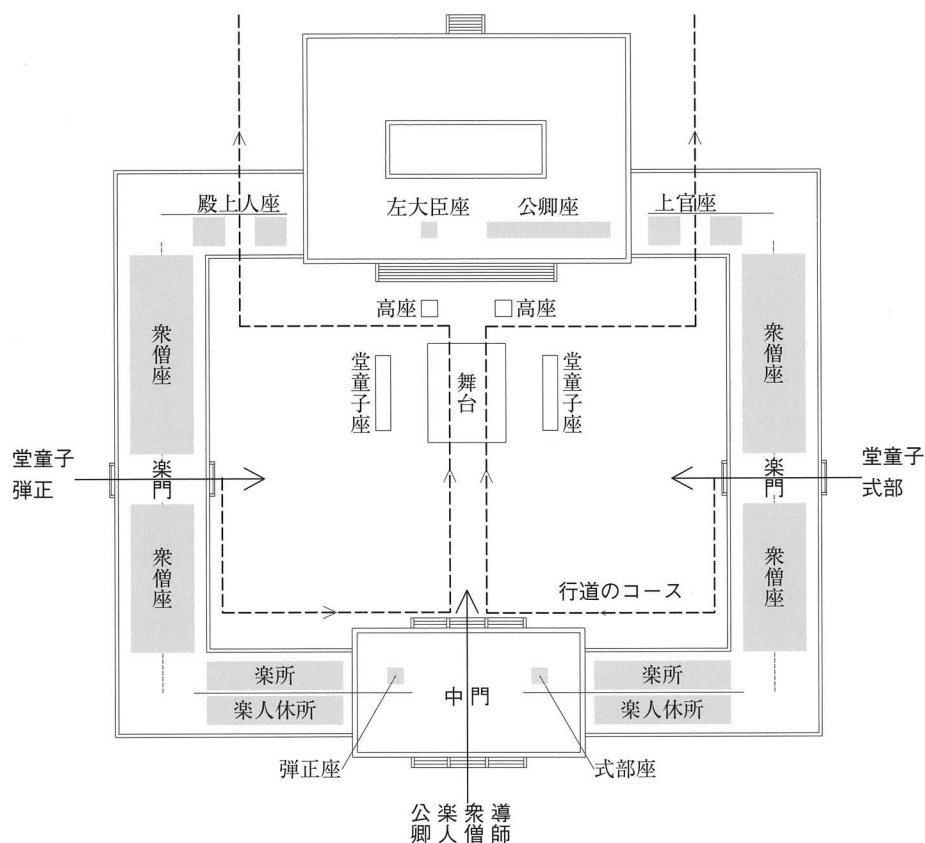


2 中金堂院の歴史と空間利用

中金堂院の歴史 興福寺は、藤原鎌足の夫人鏡女王が夫の病平癒を祈願して建立した山階寺を起源とする。672年の壬申の乱の後、都が飛鳥に遷ると山階寺は厩坂に移されて「厩坂寺」と称された。平城遷都により、厩坂寺も平城京に移り「興福寺」と号された。興福寺は藤原氏の氏寺でありながら、藤原京の弘福寺に代わって大安寺、薬師寺、元興寺とともに四大寺の1つにも数えられていた。

創建後、中金堂院は永承元年(1046)の火災をはじめ、計7度焼失の記録がある(永承元年(1046)、康平3年(1060)、永長元年(1096)、治承4年(1180)、建治3年(1277)、嘉暦2年(1327)、享保2年(1717))。古代中世の中金堂院は焼失のたびに再建を重ねてきた。近世には宝永4年(1707)に西回廊が倒壊し(『東大寺年中行事日記』)、享保2年(1717)に中金堂、回廊、中門を焼失する(『興福寺伽藍炎焼之記』)。享保14年(1729)には再建事始が行われたが復興は進まなかった。文政2年(1819)には平面規模を縮小した金堂仮殿が建てられたものの、中門、回廊は再建されなかった。

回廊と「楽門」 興福寺の回廊建物は、絵図などの記録によれば、梁行2間で棟通りに連子窓をいれた壁が通り、その両側が吹き放しとなる複廊の構造であった。東西回廊の中程には「楽門」が開いていた。『肝要絵図類聚抄』(15世紀、興福寺蔵)や『興福寺建築諸図』(17世紀頃、東京国立博物館蔵)所収の回廊平面図には、東西回廊のほぼ中央に「カク門」「扉」の記載がみられる。「楽門」の屋根は、絵画資料には回廊と一棟の構造に描かれることが多いが、『春日社寺曼荼羅』(大阪市立美術館蔵)では回廊より一段高くなっている(第22図3・4)。東面回廊の桁行方向の柱間が「楽門」の南北で異なっていたことは、『興福寺建築諸図』所収の回廊平面図に記された柱間寸法からうかがえる。

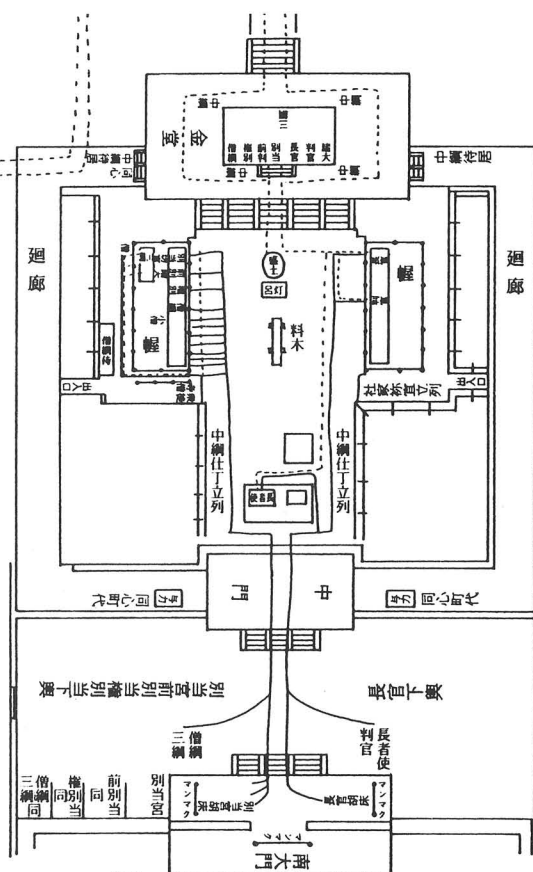


第2図 興福寺再建供養会 会場略図(『造興福寺記』『興福寺供養次第』をもとに作成)

興福寺再建供養会については、永承3年(1048)の供養を記した『造興福寺記』と、建久5年(1194)の供養を記した『興福寺供養次第』に詳しい。興福寺の再建供養会は、金堂だけではなく内庭部や回廊も利用する「庭儀^{ていぎ}」の法会であった。金堂の前には、法会進行の中心的な役割を担う導師が座る「高座」が置かれ、その南には「舞台」が設けられた。舞台には香炉などをのせる机や舞人の座があり、僧侶が境内を巡る儀礼である「行道^{ぎょうどう}」の時の通路にもなった。内庭部は、儀式活動の中心の場となっている(井上充夫『日本建築の空間』鹿島出版会、1969年)。

儀式の際に中金堂院内に入場する門は、参加者の身分や役割によって異なった。導師、祝願師、衆僧、楽人、公卿など法会の参加者のほとんどは、中門から中金堂院に入場する。一方、式部省・弾正台の官人や、堂童子をつとめる四位五位の官人は、東西廊に開く楽門から入場する。また、法会の行道時には、衆僧たちが楽門の位置で基壇を昇降して東西廊の壇上の座と内庭部とを出入りした。

法会の時には、中金堂院の周辺や内庭部に幄舎や棧敷を仮設することもあった。享保14（1729）の再建事始では、内庭部に幄舎が設けられている（第3図）。これらの施設は竹、縄、板などで造られていた（『養和元年記』『興福寺年中行事』）。1999年度の回廊東北部の調査では、こうした仮設建物の痕跡を内庭部で検出している（『概報Ⅱ』）。



5